



▲水よけ場 (須賀神社)



▲壁に腰板をはった民家(大洲市若宮)

背景

この話は、あらがうことのできない肱川の洪水と共生するために生まれた水防の知恵に関するものです。肱川流域は手のひらのような形をしており、肱川が貫流する大洲盆地に多くの支流が流れ込んでいます。このため、大洲盆地には川の水が集中し、雨期にはいと毎年のように肱川が氾濫し、水害に見舞われてきました。この大洲盆地の集落では、定期的ように襲って来る洪水への備えとして、家の床を地盤より高くし、壁にはこしいた腰板をはったり、一階を板間だけにしたりする水防建築などの知恵を生みだしました。

アクセス 須賀神社

- JR伊予大洲駅より北北東へ直線距離約100m
- 大洲市若宮
- 緯度経度 北緯33度31分13秒, 東経132度32分45秒



愛媛県大洲市の大洲盆地は、昔から水害の常襲地帯として有名でした。盆地内の集落は、洪水の被害をさけることを最も優先した場所が選ばれてきました。昭和四〇年ころまでの航空写真では、盆地の低地には集落はほとんど見られず、大部分が山すそに沿った比較的高い場所に帯状にならんで立地しています。大洲盆地の低地に開けた若宮の集落は、肱川の自然堤防上の微高地に立地していたため、洪水のたびに、多くの家が浸水する被害を受けてきました。

肱川沿川の集落では、地域を洪水から守ろうとする土手（小規模な堤防）を築きましたが、闘う相手が余りにも大きかったため、全村が水没するという水害からは解放されませんでした。そのため、ここに住む人たちは、家の石垣を出来るだけ高く積み立てるようにして浸水に備える生活を続けてきました。中でも若宮では洪水への備えが特に厳重で、全ての家が二階建てでした。また床を地面より七〇から八〇センチメートルも高くし、壁には腰板を張って保護し、一階は板張りの間として重要な家具は二階に置いた家が多くありました。また、大洪水に備えて、若宮の上組・中組・下組の地域ごとに二箇所ずつ神社や寺院、庄屋などの屋敷全体を高くして高石垣を築き、水をよける場所としていました。さらに避難用の船なども用意していました。

こうした高石垣の屋敷は地域が浸水した時の避難地の役割を担っていたのです。地域の中で最も高い造りとなっています。現在でもそのような「水防場」が多く残っており、大洲市若宮町にある須賀神社などがそうです。まさしく、水害に備えた究極の危機管理対策そのものであり、暮らしを守るために生まれた「暮らしの知恵」です。